

舞鶴市糸井文庫蔵『風流新版 竜宮曾我物語』翻刻・語釈・抄訳および英訳

畠 恵里子¹・荒川 吉孝²・原 豊二³・西野 由紀⁴・園山 千里⁵・小室 智子⁶・吉野 健一⁷

要旨・本稿は、舞鶴市が所蔵している糸井文庫の『風流新版 竜宮曾我物語』を対象として、翻刻・語釈・抄訳・英訳を付し、国内外の研究者に資するようにした試案である。

キーワード・糸井文庫、浦島伝説、曾我物語、黒本

1. はじめに

舞鶴市糸井文庫蔵『風流新版 竜宮曾我物語』（上巻・下巻）を取り上げ、翻刻に加え、語釈・抄訳・英訳を施した試みである。基礎的翻刻を小室・吉野が、近世文化を踏まえた翻刻の再検討・語釈を西野が、抄訳を畠が、英訳を荒川・園山が担当した。翻刻・抄訳の一部において原・園山が意見を提示し、全作業において西野が意見を提示した。全作業において畠が検討・確認した。なお、いずれを漢字もしくはかなと判断するかは、無論、読者の権利である。

・底本は舞鶴市糸井文庫を使用した。

● 上巻 (一丁表)

浦島太郎、亀を海へ放し、まどろむ。
亀、夢の内に現れ、「竜宮には魚ども曾我の狂言を催せし故、なぐさみに御覧あれかし。御迎いに参りたり。」といふ。

【語釈】○あれかし してほしい。

(一丁裏)

古瀬の鰐、梶原
竜宮の主、船遊山（ふな・ゆ・さん）にいで給う。

2. 翻刻・語釈

【凡例】

- ・翻刻にあたり、かな遣いは原則として原文にしたがい、句読点および濁音・半濁音については適宜ほどこした。
- ・原文にふりがながある場合はすべて付し、さらにこんにちの一般読者の便宜のために必要であると判断したものにはふりがなを付した。
- ・ふりがなについてはそれぞれ語の直後の（）内に記した。
- ・原文に促音・拗音がある場合はすべて小さく表記した。
- ・原文が漢字表記の場合であつてもひらがなに改めたものがある。また、原文がひらがな表記の場合であつても漢字に改めたものもある。
- ・漢字の字体や送り仮名の用法は、こんにちの一般的なものにできるかぎり近づけた。
- ・繰り返しをしめす踊り字（／＼、ゝなど）はそれもとの字に置き換えた。
改行やカギ括弧は適宜ほどこした。

1 舞鶴工業高等専門学校 人文科学部門 准教授

2 舞鶴工業高等専門学校 人文科学部門 特任教授

3 ノートルダム清心女子大学 文学部 准教授

4 天理大学 文学部 准教授

5 ポーランド国立ヤギエロン大学 文献学部東洋学研究所 准教授

6 舞鶴市郷土資料館 学芸員

7 京都府立丹後郷土資料館 学芸員

【語釈】 ○鬼王新左衛門 浄瑠璃、歌舞伎などの曾我物に登場する曾我時致の従者で道三郎の兄。 ○白酒売り 「白酒」は甘味の強い白濁した濃い酒。歌舞伎では街頭を流す物売りの風俗を舞踊化した「物売物」の系統があり、実際の身分を隠す「やつし」の姿で登場する。「白酒売り」もそのひとつ。

(三丁裏)

大鮫、工藤左衛門祐経

「おれが揚げ詰めにしてをく虎鱗をなぜよこさん。きつた祐成、隠れると出るやい。」

鯰、八幡の五郎

鯰、八幡の五郎
散々踏まれる。

【語釈】 ○揚げ詰め ここでは遊女である虎御前を連日、独占して遊興にふけつていることをいう。 ○よこさん 送つてこない。渡さない。 ○きつたつながつている関係や継続する事柄、続いている気持ちや話しなどを断つ。ここでは虎御前を揚げ詰めにしていた祐経が、それを邪魔した祐成に対して怒っている。 ○やい 文末にあつて聞き手に強く働きかける語。

(四丁表)

大磯の虎鱗、祐成を搔取 (かい・どり) にて隠し、そしらぬ躰にている。

大鮫、鬼王新左衛門

となり、この様子を見ている。

河豚の小藤太

桜鯛、十郎祐成

難儀 (なん・ぎ) する。

【語釈】 ○搔取 打掛け小袖のこと。 ○難儀 平易でないことがらに苦しみ悩むこと。

(四丁裏)

大磯の虎
桜鯛、曾我の十郎、喜ぶ。

大鮫、鬼王
大見・八幡を散々ぶちのめす。
河豚の大見の小藤太

【語釈】 ○ぶちのめす うちのめす。打ち倒す。

(五丁表)

「うぬ、よく祐成をぶつたな。」

あかへなの三郎義秀

鯰八幡の三郎

「ああ、御免御免。」

鯰の道三郎

力を得て喜ぶ。

【語釈】 ○うぬ 相手に対する、激しい罵りのことば。おのれ。 ○ぶつた殴つた。

海老、曾我の五郎時致母の勘当受け、嘆く。

時致が勘当の訴訟する。

(五丁裏)

海老、曾我の五郎時致母の勘当受け、嘆く。

時致が勘当の訴訟する。

河津の後家鮫鱗 (あん・こう) 御前

河津の後家鮫鱗 (あん・こう) 御前

河津の後家鮫鱗 (あん・こう) 御前

河津の後家鮫鱗 (あん・こう) 御前

「ゑゑ、勘当の身でなくば、あの臼挽いてしまおうに。」

絵師富川房信

【語釈】 ○河津の後家 曾我兄弟の父、河津祐泰の後家。兄弟の母。

●下巻

(一丁表)

海老、曾我の五郎時致

矢の根を研ぐ。

「父の仇（あだ）には、ともに天の頂かず。五つや三つの頃よりも。」

【語釈】 ○矢の根 矢柄（や・がら）の先端にあり、射当てたとき敵を突き刺すように作った部分のこと。また、「矢の根」は享保一四（一七二九）年に「扇恵方曾我（すえひろ・え・ほう・そ・が）」の一場面として二世市川団十郎が初演し、後に七世団十郎によつて「歌舞伎十八番」のひとつにくわえられた。本作では「扇恵方曾我」をふまえているか。

（一丁裏）
和田の頭一門の魚、大磯にて大騒ぎ。

大磯の虎鱗
益を持ち、次の間へ立ち、祐成に差す。
桜鯛、曾我の十郎祐成

【語釈】 ○和田の頭一門 和田義盛一門のこと。なお、朝比奈義秀は義盛の三男である。

（二丁表）
「皆々座敷へ出でよ。」と言う故、「如何せん。」と胸を痛める。

海老、曾我の五郎時致
胸騒ぎせし故、鯨にうち乗り、大磯の荒海へ急ぐ。

【語釈】 ○胸を痛める ひどく心配する。 ○胸騒ぎ 凶事の予感として、なんとなく心が穏やかでないこと。

（二丁裏）

化粧（け・わい）坂の少将、鮎魚女（あいなめ）

大磯の虎鱗
桜鯛、曾我の十郎祐成

【語釈】 ○化粧坂の少将 大磯の虎と同じ郭にいる遊女。

(三丁表)

海老、曾我の五郎時致

草摺引（くさ・ずり・びき）、「面倒な。あかへ（あかへな）、即、放せ。邪魔をすると五百羅漢の屋根へ放り出すぞ。」

大鮫、工藤左衛門祐経

「時致、この赤木作をやる。受け取れや。きたる三月の潮干に討たれてくれん。まづそれまでは互いにさらばア。」

あかへな（三郎義秀

「兄い一番。とんまれとんまれ、とんまれなあ。」

【語釈】 ○草摺引 「草摺り」は鎧（よろい）の胴の下に垂れて、大腿部を覆うもの。腰の下にあって、草の摺れる部分にあるための名称という。「草摺引」は和田義盛一門の酒宴の際、曾我五郎時致の草摺を、朝比奈義秀がつかんで宴席に引き込もうとして力くらべになつた話がもととなり、互いに引き合うことの意に転じた。 ○五百羅漢 仏教用語で、彫像を安置してまつてある場所をさす。ここでは小田原市扇町にある曹洞宗天桂山玉宝寺のことか。ただし当寺は天文三（一五三四）年の創建であるため、『曾我物語』成立の時期には存在しない。また、木造の五百羅漢像も享保十五年（一七三〇）年から宝暦七（一七五七）年にかけて造立されたもの。ここでは和田義盛の屋敷がある大磯から玉宝寺のある小田原まで朝比奈義秀を投げてやろうという曾我五郎時致の大力自慢がうかがえる。 ○放り出す 物などを投げて外へ出す。また、乱暴に外へ出す。 ○赤木作 刀剣の柄を、漆を塗らないで赤地のままの花櫛（か・りん）の材で作ること。また、その刀剣。とくに、工藤祐経が曾我五郎時致に与えたという赤木の柄の短刀をさしていうことが多い。 ○三月の潮干 隅暦三月の大潮のとき、舟で海へ漕ぎ出し、干潮になれば舟を降りて潮干狩などをし、潮が満ちてくれればまた舟に戻つて遊ぶこと。

（三丁裏）

四郎忠常

手柄。
すでに建久年中、三月の潮干になりしかば、「あいたあいた。」

【語釈】 ○四郎忠常 源頼朝の側近、仁田忠常（仁安二（一一六七）年～建仁

三(一一〇三)年。曾我祐成を討ち取つた。

(四丁表)
竜宮の主

潮干(しを・ひ)の浜辺へしじみをとりにいで給ふ。

「ああ悲しや。」

「幾年ぶり、しあふだ。」とあたける。

【語釈】○しあふ 互いに戦う。ここでは潮干を戦に見立てている。○あたける あばれさわぐ。

(四丁裏)

桜鯛、曾我の十郎祐成
兄弟、狩屋へ忍び入り、本望遂ぐる。
海老、曾我の五郎時致

【語釈】○狩屋 狩り場に設けた寝所。『曾我物語』では、源頼朝が富士の裾野で巻狩を開催し、工藤祐経もそれに参加していたようすが描かれている。巻狩の最後の夜、曾我兄弟は寝所に押し入り、父の仇である祐経を討ち果たす。

○本望 かねがね抱いていた志。本懐。

浦島太郎は亀を海へ放して、しばらくまどろんでいた。すると、亀が夢に現れて、「魚たちが竜宮で、父の仇討ちを語る『曾我物語』の狂言を行いますので、座興として、どうぞ御覧いただきたいのです。御迎えに参りました。」と言つた。以下、狂言の内容である。

3. 抄訳

古瀬の鰹は、源頼朝の側近・梶原の役である。竜王は、源頼朝の役であり、船遊びをしている。大鮫は、悪玉である工藤左衛門祐経の役であり、曾我兄弟の父を殺した仇敵である。河豚は、工藤祐経の家臣である大見小藤太の役、鰯は、工藤祐経の家臣である八幡三郎の役であり、かれらは何やら不満げな顔つ

きである。一方、桜鯛は、善玉である兄・曾我十郎祐成の役である。武勇に優れた朝比奈三郎義秀の役の、アカヘナという魚もいる。海老は、善玉である弟・曾我五郎時致の役である。

ある時、鰯は、虎鰐と桜鯛の二人を番屋へ忍ばせていた。鰯は、祐成の家臣である道三郎の役である。虎鰐は、祐成と親密な関係にある遊女の虎御前の役であり、川鯛(かわ・はぜ)が禿の役として控えている。ちょうどその時、大鮫の家臣役の鰯と河豚とが、桜鯛を見つけてしまった。背後では、悪玉の大鮫が見張っている。海老の家臣の鬼王新左衛門の役である大鮫は、身をやつして白酒売りの姿となり、虎鰐の近くへひそかにやつてきた。「俺が入れ込んでいる虎鰐を、なぜ渡さないのだ。桜鯛め、隠れずに出で來い。」と大鮫は怒り、桜鯛の家臣である鰯も、大鮫の家臣である河豚にひどく踏みつけられてしまつた。そこで虎鰐は、自分の着ている打掛で桜鯛を匿つた。この様子を見ていた白酒売り姿の大鮫は、たちまち正体をあらわして、河豚と鰯とを打ち倒した。一方、海老はといえば、鮫鯛(あんこう)御前の勘当を受けて悲嘆していた。鮫鯛は、曾我兄弟の母の役である。海老は、父の仇討ちのために、武具である矢の根を熱心に研いでいた。

その頃、和田一門の魚たちは、大磯で酒宴をしていた。海老は胸騒ぎがしたため、鯨に乗つて、大磯の荒海を急いだ。すると、化粧坂の少将という遊女の役である鮎魚女(あいなめ)、虎鰐、桜鯛がいた。アカヘナに邪魔された海老は、「酒宴へ引きずり込もうとするとは、面倒な。アカヘナめ、放せ。邪魔をするなら、五百羅漢の寺の屋根へ放り出してやるぞ。」と言つた。海老に対峙した大鮫は、「海老よ、この赤木作りの刀剣をくれてやる。来たる三月の潮干の日に討たれてやろう。それまでさらばだ。」と言つて、立ち去つた。

そして、建久年中の三月の潮干の日、竜王が潮干の浜辺へ覗をとりにお出かけになつた時、桜鯛と海老の曾我兄弟は狩屋へ忍び入り、大鮫を仕留めて父の仇討ちを果たして、ついに本懐を遂げたのであつた。その後、源頼朝の側近・仁田四郎忠常は、仇討ちのために乱入した祐成を斬り、手柄を立てたという。

* * * * *

4. 楽器

Fūryū Shinban Tatsu-no-miyako Soga Monogatari

(“The Tale of the Soga Brothers” Staged at the Dragon’s

Palace: A New Version)

Having released a turtle into the sea, Urasshima Tarō fell into a doze. After a while, the turtle appeared to him in a dream and said, “Fishes will perform the play *The Soga Brothers* at the Palace of the Dragon King. The play shows how the two brothers avenge their father’s death. I have come for you because we would really like you to see it.” The gist of the play is as follows.

* * * * *

A bonito plays Kajiwara, a close associate of the shōgun, Minamoto-no-Yoritomo (Yoritomo of the Minamoto family). The Dragon King, who plays Yoritomo, is on a boat excursion. A big shark plays the villain and bitter enemy, Kudō Saemon Suketsuné, who killed the father of the Soga brothers. A pufferfish plays Ōmi Kotōta, a retainer to Kudō Suketsuné. A catfish plays Yawata-no-Saburō, also a retainer to Kudō Suketsuné. Both Ōmi Kotōta and Yawata-no-Saburō have a discontented look. On the other hand, the two heroes, Soga-no-Jūrō Sukenari and Soga-no-Gorō Tokimuné, are played by a cherry bass and a lobster respectively. An *akahena*¹⁾ plays Asahina Saburō Yoshihidé, who is unmatched for military prowess.

Once a flounder hid a *toragisu*, or a rosy sandperch, and the cherry bass *toragisu* of Ōiso plays Tora-gozen, a courtesan on close terms with Sukenari. A goby plays a maiden apprentice, who stood beside her as an attendant. Just then, the catfish and the pufferfish, the retainers to the big shark, found

the cherry bass. The big shark stood behind them watching. A big flatfish in the role of Oniō Shinzaemon, a vassal of Tokimuné, disguised himself as a white saké seller and crept into the coast town of Ōiso where the *toragisu* lived. The big shark rained down angry shouts on the cherry bass, “Why don’t you hand over Tora-gozen to me? I am mad about her. Come out, come out, wherever you are.” The flounder, who served the cherry bass, was trampled down by the pufferfish. So the *toragisu* hid the cherry bass under her robe. The big flattish, who had been watching this in the guise of a white saké seller, instantly revealed himself and struck down the pufferfish and the catfish.

As for the lobster, he was in deep grief after having been disowned by Ankō gozen, or Lady Anglerfish, who was the mother of the brothers. The lobster was intently sharpening arrowheads to avenge his father.

At that time, the Wada clan were holding a banquet at Ōiso. Feeling uneasy, the lobster hastened on board a whale through the rough sea to Ōiso. There he met the *toragisu*, the cherry bass, and a rock-trout in the role of a courtesan named Kewaizaka-no-Shōshō. Hindered by the *akahena*, the lobster said, “It’s a nuisance dragging me into the banquet. Get your hands off me! If you stand in my way, I’ll throw you on to the roof of the Gohyaku-rakan Temple.” Standing face to face with him, the big shark said, “You can have this wooden dagger, lobster. I am for you on the shellfish gathering day next March.” He left, saying “Farewell”.

The Dragon King went gathering corbicula clams in the month of March on the lunar calendar in the Kenkyū era²⁾. The cherry bass and the lobster in the roles of the Soga brothers stole into a shooting lodge, and brought down the big shark, while Nitta Shirō Tadatsuné, a close associate of Minamoto-no-Yoritomo, performed a feat by cutting down Sukenari, the elder brother, with his sword. The Soga brothers avenged their father, and thus achieved their long-cherished desire.

Notes

1) An *akahena* It may be an amberjack, or a *kanpachi*, which is also called

akabana or *akahana* in Japanese.

2) the Kenkyū era From 11 April 1190 to 27 April 1199.

学教授・赤間亮氏／謝意をあらわす。

<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/maiduru/index.htm>

(2018年1月最終確認)。英文を校閲した舞鶴工業高等専門学校非常勤講師ダ

謝辞:糸井文庫の閲覧および本稿への掲載を許可した舞鶴市／謝意をあらわす。

舞鶴市・立命館大学アーモ・リサーチセントラル一作成 DB 閲覧に伴い、立命館大

学教授・赤間亮氏／謝意をあらわす。

(2018. 1. 12 取材)

Furyū Shinban Tatsu-no-miyako Soga Monogatari (“The Tale of the Soga Brothers” Staged at the Dragon’s Palace: A New Version)

Eriko HATA, Yoshitaka ARAKAWA, Toyoji HARADA, Yuki NISHINO, Semri SONOYAMA, Tomoko KOMURO and Ken’ichi YOSHINO

ABSTRACT: This article comprises a reprint of Furyū Shinban Tatsu-no-miyako Soga Monogatari in the possession of Itoi Bunko (Itoi Library) in Maizuru City, with notes, an abridged modern Japanese version, and its English translation. We hope this will be helpful to researchers both at home and abroad.

Key Words: Itoi Bunko, Urashma legends, Soga Monogatari (*The Tale of the Soga Brothers*), Kuro-hon